

〈研究ノート〉

## 高齢化社会と地域福祉 (9)

——日韓の高齢者生活意識調査結果の因子分析モデル——

広 田 と も よ

(受付 2001年9月28日)

### 目 次

- I. 研究の目的
- II. 調査方法
- III. 分析条件
- IV. 結果
- V. 因果モデル
- VI. 考察
- 参考文献及び資料

### I. 研究の目的

本研究は1999年6月から継続的に行っている「高齢化社会と地域福祉の日韓比較調査研究」<sup>1)</sup>の分担研究である。

日本は短期間のうちに高齢化率が急上昇し、これまで世界が経験したことがないスピードで世界最高水準にまで至ることが、すでに現実のものとなった。現在この高齢化率の上昇にともない年金や高齢者医療・福祉等にかかる国や地方自治体の財政は圧迫され続け、財政破綻の危機がさかんに叫ばれている。そして、このほぼ不可逆的な社会構造の変動に対する政策は緊急の課題とされている。

また韓国においては現在高齢化率約7%で、国連でいう高齢化社会にさ

---

1) この調査研究は広島修道大学総合研究所の調査研究費を受けたものである。

しかかった状態である。しかし今後は日本が経験している以上の急激な高齢化率上昇の波を受けることがすでに予測されている。

こうした急激な高齢化という変化は、さまざまな社会的問題と不安を発生させている。その対策として今後は、単なる生活の援助や寿命の延長ではなく、高齢者の自立した期間である“健康寿命”をいかに延ばすことができるかが社会福祉政策には欠かせないキーワードとなってくる。これは財政負担の軽減を図るうえで最大のポイントとなるだけでなく、“健康寿命”の延長は何より高齢者自身にとって最大の理想でもある。

今回の調査研究では高齢者の日常生活行動や意識に関する質問を行い、その結果から生活意識の構造を分析しモデル化を試みるという過程において日本と韓国の比較を行う。そこから社会環境と生活意識の関係性およびその相違点を探ることを目的としている。調査地を日本と韓国に設定した主な理由は、①日本と韓国は両国とも東アジア文化圏に属し価値観や社会的通念が比較的似ていること。②かなりの部分において雁行形態として論じることが可能であるという点で日本に似た経済社会発展を経験したこと。③両国とも高齢化率の急上昇によるいわゆる超高齢社会への突入を目前にしており、介護ニーズや財源などの問題に関する現状分析と課題検討の必要に迫られていること、の3点である。

人間が生物であるからには加齢とともに身体的能力が低下することは生理学上まぬがれられない。しかし、それでも高齢者ができるだけ長い期間いわゆる“現役”として日常生活を自立して送ることができるような社会的サポートとはどのようなもので、それには何が必要なのか。また“健康寿命”の期間を左右する大きな要因として、高齢者自身の自助努力がそのひとつと考えられるが、その自助努力を促すような社会的アプローチにはどのようなものになり得るのか。またそれは社会環境の成熟度のちがいによって異なるのか。これらのことをふまえて本論文では、高齢者の自立を促すような社会的アプローチのかたちとその要因を模索する。

## Ⅱ. 調 査 方 法

### 1. 日 本

愛媛県宇和島市は宇和海に面した愛媛県西南部に位置し、県庁所在地の松山（人口474,531）から直線距離で約70 km（車で約3時間）離れている。人口は61,447人、高齢化率24.0%（2000年）であり全国に先駆けた高齢地域であると言える。

この宇和島市在住の高齢者（65歳以上）を対象に、2000年9月、アンケート聞き取り調査を実施した。宇和島市内中心部に在住する一般的な高齢者及び宇和島市内の高齢者福祉施設においてデイサービス利用のための来訪者を対象に、訪問直接面接方式で207人から回答を得た。被調査者には、その場で主旨を説明し、一人一人に直接聞き取り調査を行ったことから有効票率及び回収率はともに100%である。

### 2. 韓 国

大韓民国全羅南道霊岩郡霊岩邑は韓国第4の都市、光州市（人口約120万人）から約60 km（車で約2時間）離れたところに位置し、人口10,937人、高齢化率15%（2000年）の韓国内では全国に先駆けた高齢地域である。「邑」とは日本でいう行政単位の「町」に値するものである。

この霊岩邑在住の高齢者（65歳以上）を対象に2000年8月、アンケート聞き取り調査を実施した。霊岩邑の中心部から半径約5 km以内で、各部落ごとに点在する敬老堂（日常的に部落ごと高齢者たちが集まって話をしたり、農作業の休憩を取ったりする場所）のうち無作為に15カ所を選択し、訪問直接面接方式で合計262人から回答を得た。調査項目をハングル語で習得済みの学生調査員25人、現地学生通訳5人及び現地行政職員等の協力を得て行った。被調査者には、その場で主旨を説明し、一人一人に直接聞き取り調査を行ったことから有効票率及び回収率はともに100%である。

### Ⅲ. 分 析 条 件

ここでは分析の条件を示すとともに、日韓の平均値比較結果も同時に掲載する。

#### 1) 基本的属性

##### ①年 齢

年齢 (歳)	日 本	韓 国
65～69	69 ( 33.3%)	98 ( 37.4%)
70～74	56 ( 27.1%)	83 ( 31.7%)
75～79	44 ( 21.3%)	57 ( 21.8%)
80～84	25 ( 12.1%)	19 ( 7.3%)
85以上	13 ( 6.3%)	5 ( 1.9%)
合 計	207 (100.0%)	262 (100.0%)
平 均	72.0	72.0

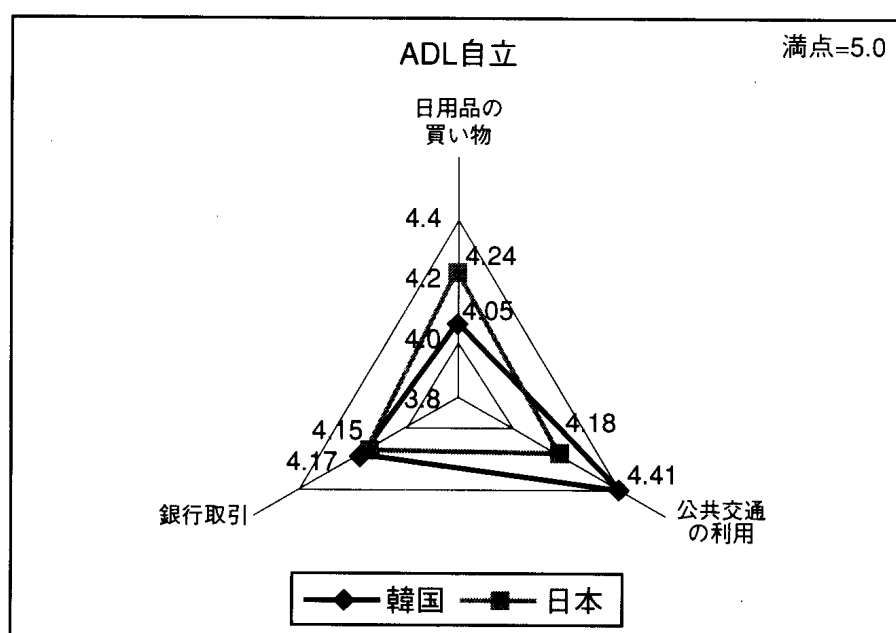
##### ②性 別

性 別	日 本	韓 国
男 性	75 ( 36.2%)	141 ( 53.8%)
女 性	132 ( 63.8%)	121 ( 46.2%)
合 計	207 (100.0%)	262 (100.0%)

##### ③家族構成

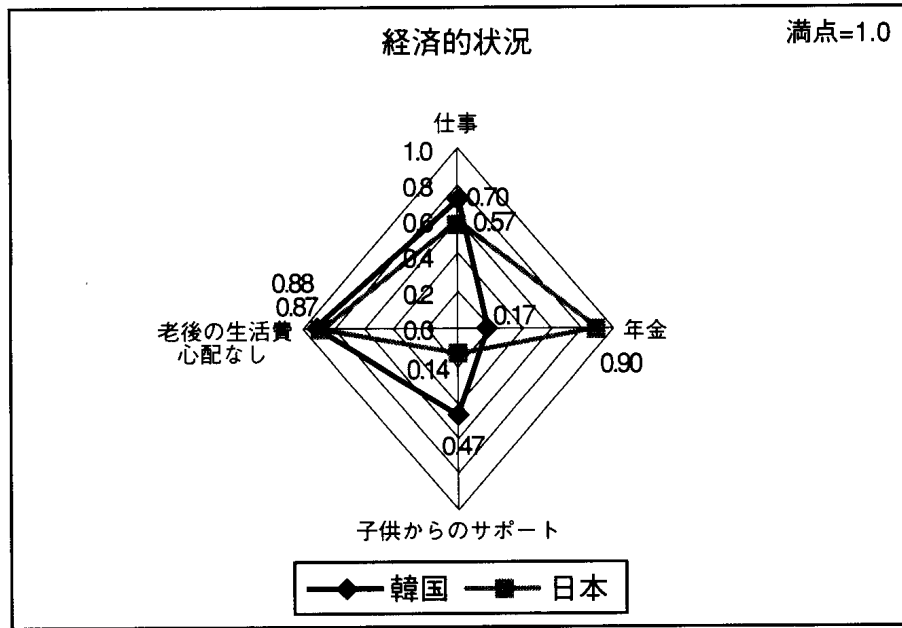
家族構成	日 本	韓 国
ひとり暮らし	43 (20.8%)	61 (23.3%)
夫婦のみ	76 (36.7%)	147 (56.1%)
同居世帯	80 (38.6%)	41 (15.6%)
その他	1 (0.5%)	3 (1.1%)
無回答	7 (3.4%)	10 (3.8%)
合 計	207 (100.0%)	262 (100.0%)

2) **ADL自立** (3項目：日用品の買い物, 公共交通を使って一人で外出, 銀行等での取引) 現在, 一般的な高齢者機能アセスメントにおいて広く使用されている評価基準である ADL (Activities of Daily Living: 日常生活動作) の測定項目のうちの3つを使用。各項目を5段階尺度で測定し, その合計点を用いる。合計点が高いほど日常生活動作における自立度が高いことを示す。



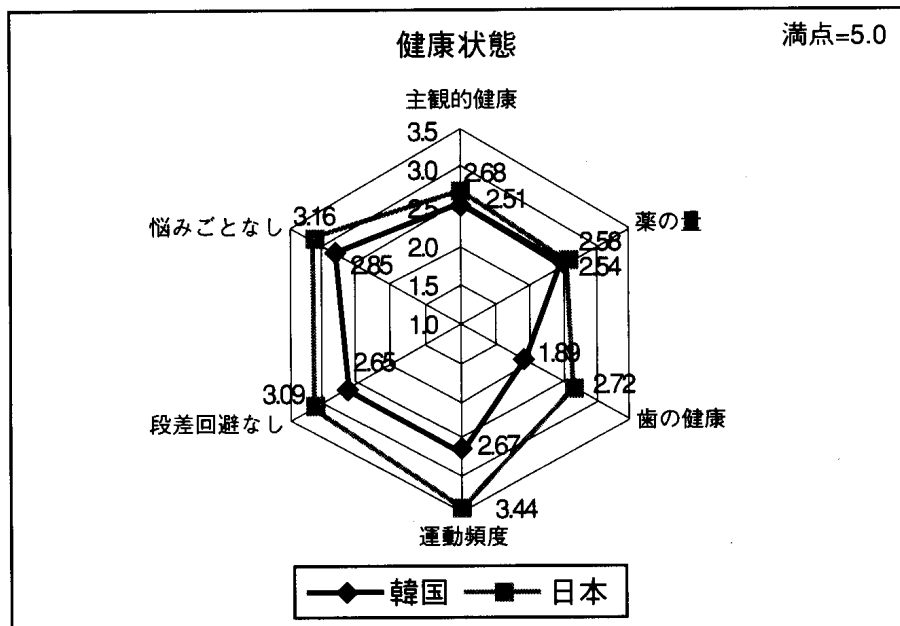
グラフ 1

3) **経済的状況** (4項目：仕事の有無, 年金の有無, 子供からの経済的支援の有無, 老後の生活費の心配の有無) 各項目2段階尺度で測定。老後の生活費の心配の有無というのは, 老後の暮らしに経済的な心配があるかその種類を質問し, 生活費自体, 病気や痴呆になったときの費用, 経済悪化による貯蓄や保険等の不安なども選択肢として挙げたが, このうち最も深刻な「生活費自体が心配」と回答した場合のみを区別した。ここでは有無のみの判定のため, 詳細にレベル分けがなされていないが, 合計点が高いほど経済的状況が良好であることを示す。



グラフ 2

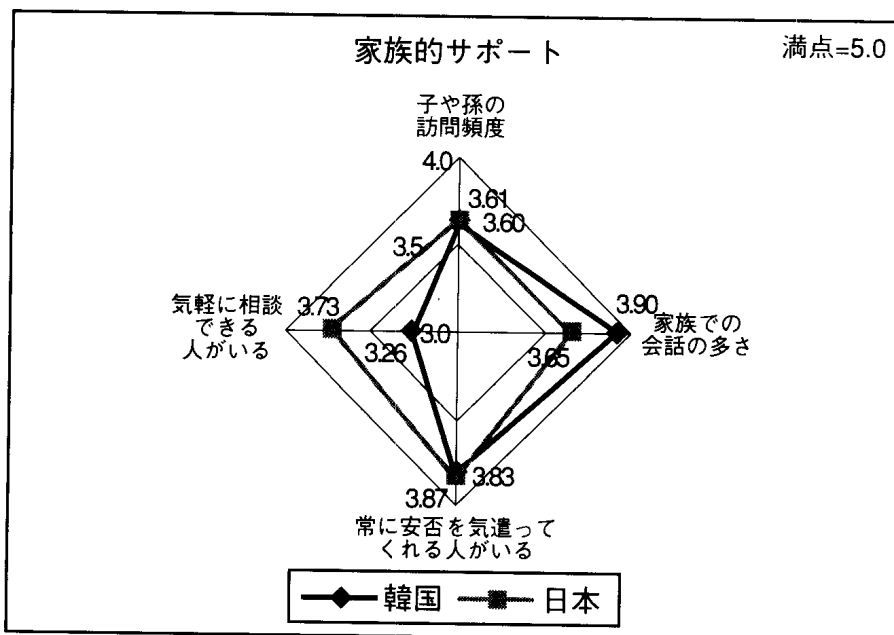
4) 健康状態 (6 項目: 主観的健康状態, 薬の量, 歯の健康状態, 運動頻度, 階段や段差を回避する頻度, 悩み事など精神的ストレスの有無) 各項目 5 段階尺度で測定。ここでは身体面での健康と精神面での健康の両方を含んでいる。主観的健康状態は自分の身体について不安になることがあ



グラフ 3

るかその度合について尋ねた。また階段や段差を回避する頻度は足腰の健康状態を簡易的に測定するため用いた。合計点が高いほど健康状態が良好であることを示す。

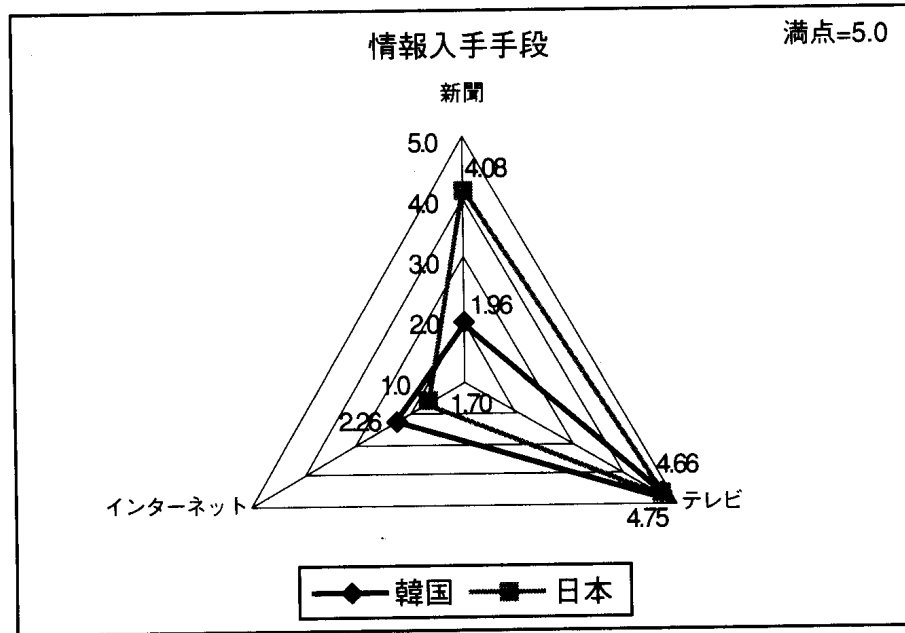
5) 家族的サポート (4項目：子や孫などの訪問頻度、家族での会話の頻度、常に安否を気遣ってくれる人の有無、日常的相談者の有無) 各項目5段階尺度で測定。家族内でサポートされている場合、地域においてサポートされている場合の如何にかかわらず、身近なところでの私的な情緒面でのサポートを測定するため、ここでは仮に「家族的サポート」と呼び、その家族的サポートが安定しているかどうかを測定する。合計点が高いほど家族的サポートが安定していることを示す。



グラフ 4

6) 情報入手 (3項目：新聞を読む、テレビを見る、インターネットの使用) 各5段階尺度で測定。自分自身で必要な情報を入手・選択するため、それができる手段をもっているかどうかを評価するものである。ここでは主たるマスメディアに接する頻度に限って測定した。なお、韓国の調査地

においては新聞の宅配システム（毎朝）は存在するが定期購読は日本や韓国都市部ほど定着しておらず，邑中心部の販売店のみが街頭販売を行っているという点を考慮しなくてはならない。合計点が高いほど情報獲得の手段及び範囲が広いことを表し，情報に対する能動性が高いことを示す。



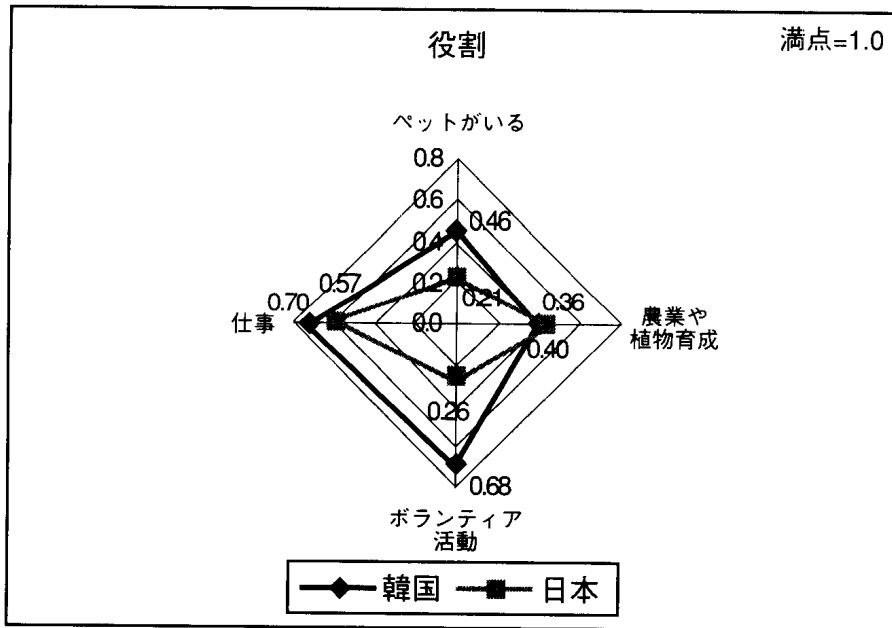
グラフ 5

7) 役割（4項目：仕事の有無，ペットの有無，植物等育成（農業を含む）の有無，ボランティア活動の有無）各項目2段階尺度で測定。何かのかたちで自分の役割をもっているかを測定するものである。自分自身が必要とされていると感じる機会があるという点で，合計点が高いほど社会的役割保持が高いと考えられる。なお，韓国においてはペットという概念が日本とは異なり，家畜として飼っている牛，鶏，山羊なども含まれている。

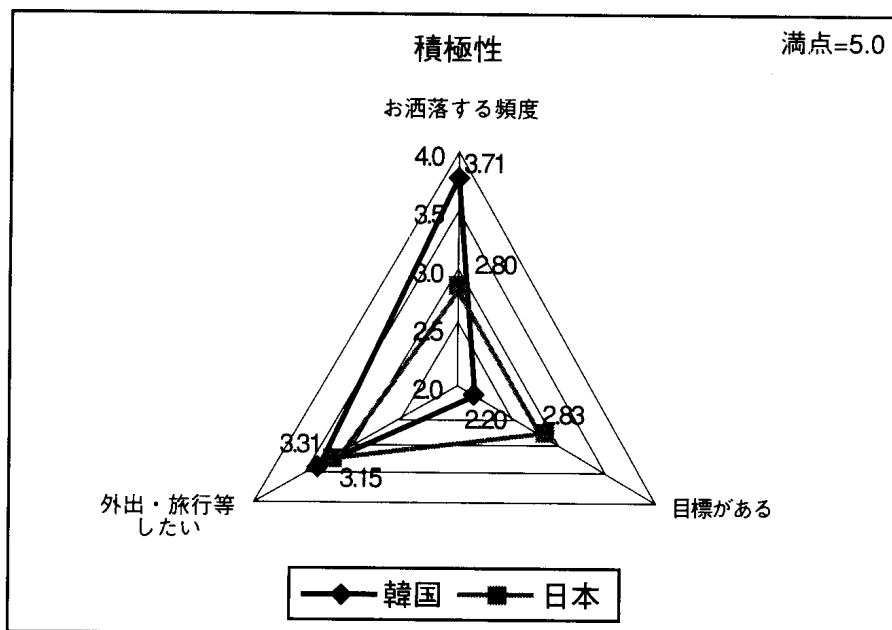
8) 積極性（3項目：おしゃれをする頻度，目標の有無，外出等希望の有無）各5段階尺度で測定。合計点が高いほど外向性があり，また社会的日常生活を有意義に過ごそうと努力する点において積極性が高いことを示す。



広田：高齢化社会と地域福祉 (9)



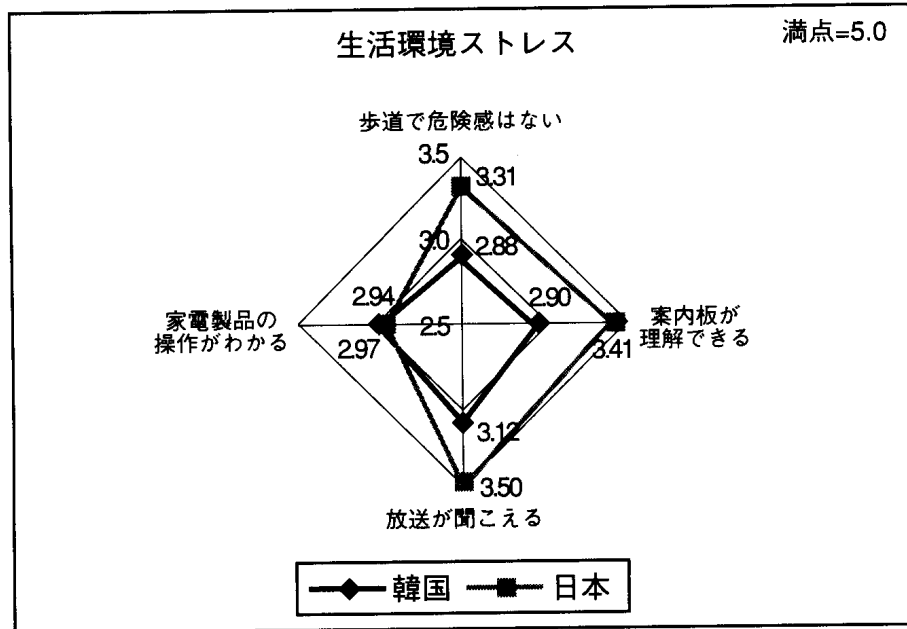
グラフ 6



グラフ 7

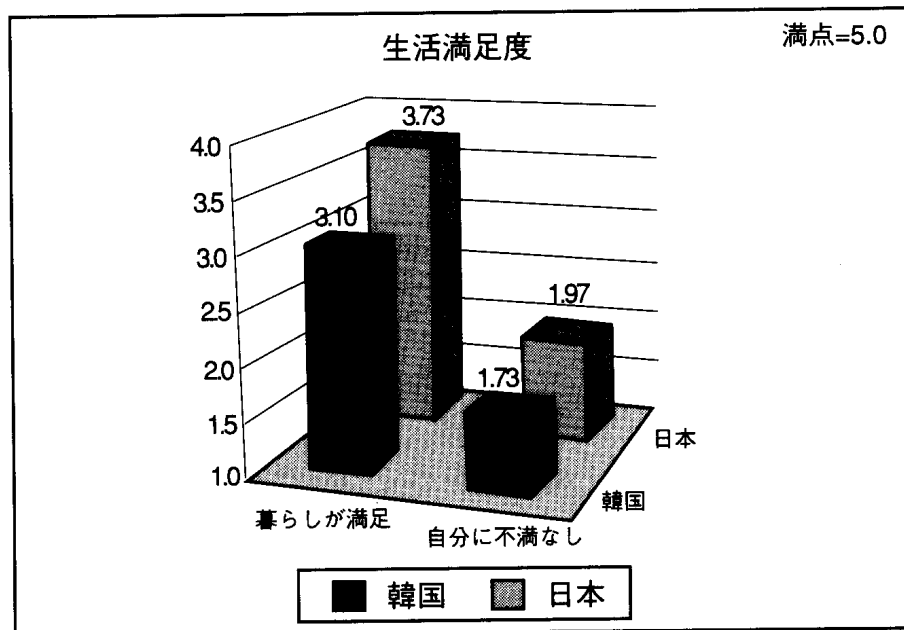
9) 生活環境ストレス (4項目: 歩道での危機感, 案内板の不足またはわかりにくい, 放送の不足または聞こえにくい, 家電製品の操作がわからない) 各項目5段階尺度で測定。点数化の際, 便宜的に危機感・困窮度の高い方から点数を低くしたため, ここでは合計点が高いほど, 日常的に町

や道路、家電製品などから感じるストレスが低いことを示している。



グラフ 8

10) 生活満足度 (2項目: 暮らしの満足, 自分に対する不満) 各5段階尺度で測定。前年の調査の際, 暮らしの満足度について尋ねたところ韓国



グラフ 9

では「非常に満足」の比率が日本に比べて極端に低くなっていた（広島修大論集第40巻第2号）ことから、今回は「満足をしているか」と「不満があるか」という2通りの尋ね方をし、それを2つあわせて測定することにした。点数化の際、不満が大きいほど点数を低くなるよう設定したので、ここでは合計点が高いほど生活満足度が高いことを示す。

#### IV. 結 果

##### 1. 日 本

###### 1) 基本的属性との相関

	年 齢	性 別	家族構成
ADL 自立	-0.474	-0.051	-0.057
経済的状況	0.155	-0.088	-0.049
健康状態	-0.443	-0.111	-0.102
家族的サポート	0.098	0.142	0.131
情報入手手段	-0.110	-0.171	-0.074
役割	-0.301	-0.136	-0.043
積極性	-0.273	0.241	0.095
生活環境ストレス	-0.369	-0.060	-0.134
生活満足度	-0.129	0.038	-0.158

###### 2) 各分類項目との相関

	ADL 自立	経済的 状況	健康 状態	家族的 サポート	情報入 手手段	役 割	積極性	生活環境 ストレス	生活 満足度
ADL自立	1.000								
経済的状況	-0.100	1.000							
健康状態	0.380	-0.114	1.000						
家族的サポート	-0.004	0.275	0.098	1.000					
情報入手手段	0.377	0.124	0.007	-0.005	1.000				
役割	0.319	0.029	0.142	0.154	0.304	1.000			
積極性	0.252	0.058	0.058	0.327	0.189	0.241	1.000		
生活環境ストレス	0.613	-0.069	0.443	0.015	0.201	0.259	0.214	1.000	
生活満足度	0.364	0.230	0.315	0.360	0.223	0.169	0.366	0.367	1.000

## 2. 韓国

### 1) 基本的属性との相関

	年 齢	性 別	家族構成
ADL自立	-0.471	-0.101	-0.007
経済的状況	-0.064	-0.092	0.015
健康状態	-0.300	-0.230	0.202
家族的サポート	-0.060	-0.066	0.068
情報入手手段	-0.195	-0.424	0.035
役割	-0.272	-0.077	-0.083
積極性	-0.423	-0.224	0.080
生活環境ストレス	-0.223	-0.101	0.143
生活満足度	-0.084	-0.081	0.255

### 2) 各分類項目との相関

	ADL 自立	経済的 状況	健康 状態	家族的 サポート	情報入 手手段	役 割	積極性	生活環境 ストレス	生活 満足度
ADL自立	1.000								
経済的状況	0.041	1.000							
健康状態	0.389	0.222	1.000						
家族的サポート	0.027	0.335	0.148	1.000					
情報入手手段	0.200	0.239	0.245	0.231	1.000				
役割	0.181	0.310	0.224	0.210	0.020	1.000			
積極性	0.362	0.151	0.408	0.250	0.366	0.310	1.000		
生活環境ストレス	0.375	0.071	0.338	0.277	0.166	0.142	0.024	1.000	
生活満足度	0.027	0.218	0.357	0.466	0.165	0.142	0.025	0.306	1.000

## V. 因果モデル

分類項目ごとの相関分析結果から、下記のようなモデル作成を試みた。各相関は単純に原因と結果を導くものではなく、複雑に直列・並列の関係の中をフィードバックしながら互いに影響を与え合っている。ここではその因果関係の強いと思われる方の関係のみを取り上げていることを注意して

おく。

この図1, 2は「ADL自立」を中心として、それに影響を与える要因のうち、ADL自立を支える要因として、いわば“原因”としての要素が強いものほど下に配置させ、“結果”としての要素が強いものほど上に配置させている。また影響には大きく分けて近接力と遠隔力の2つがあるが直接的な影響関係が強いと考えられる要因は互いに面に接している。その影響力が強いと考えられる要因ほど、面に接している長さを長く表現しており、面積も大きくなっている。

ここで言えることは、まず日韓ともに「ADL自立」を支える主要因と

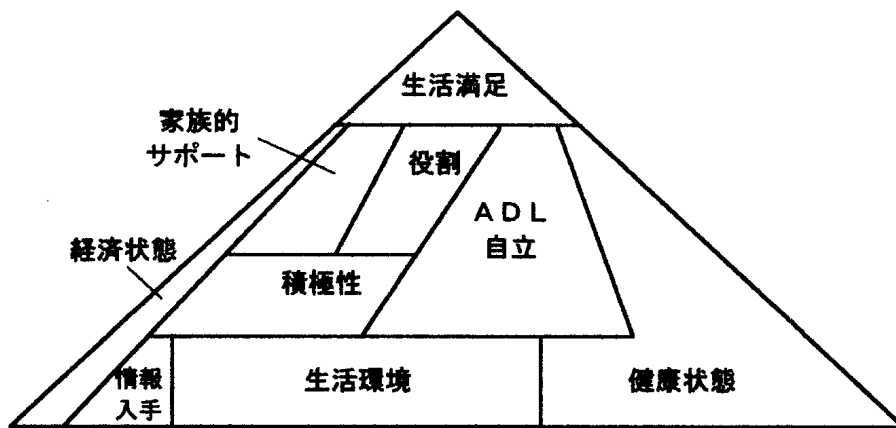


図1 日本

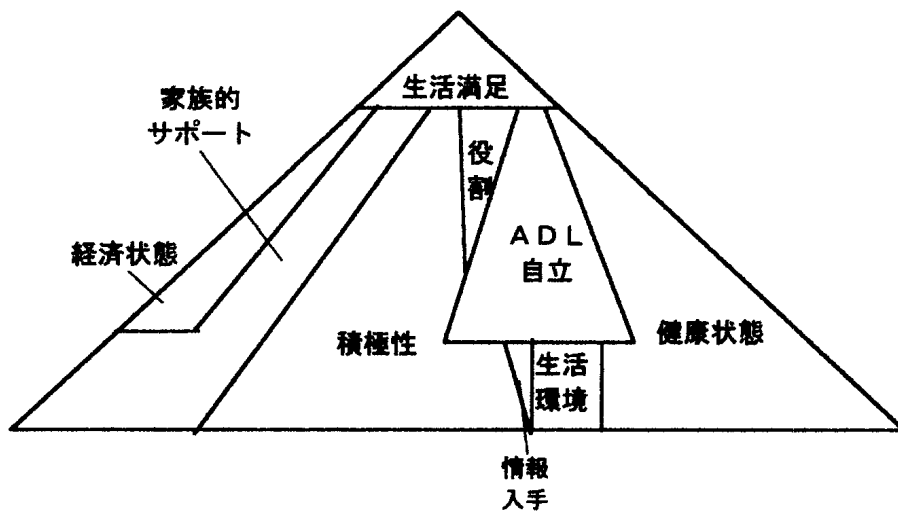


図2 韓国

して「健康状態」「生活環境」「積極性」が挙げられる。

その要因の寄与率を日韓で比較すると、「健康状態」にはさほど差が見られないが、日本は「生活環境」が大きく、韓国は「積極性」が大きくなっている。日本では歩道等での段差、施設等の標識・サインや案内板などがわかりづらいことからくる外出意欲の減退や行動範囲の縮小、家電製品の多機能化や使用法の複雑化からくるストレスなどによって、ADL自立度が左右されやすくなっている。この「生活環境」は「情報入手」と直接的に関係があり、情報に対する能動性が高ければ、ある程度生活環境の変化に対応することができ、また生活環境に対応できるから情報に対する能動性も高まるというフィードバックの関係にある。

一方の韓国は、単純集計では生活環境ストレスは日本よりも高くなっており、実際に調査で訪問した際にもインフラ整備は日本ほど進んでいないことが感じられ、道路が整備不足であちこちに水たまりができていうえ道路脇には不規則に溝があり特に足腰の弱った高齢者には危険性が高いと思われた。しかし相対的にとらえるとそうした生活環境ストレスよりも「積極性」の寄与率が非常に高くなっている。これは調査地では日本ほど社会変化のスピードが急激でなく、住み慣れた場所あるいは使い慣れたモノであるため「生活環境」の「ADL自立」に対する寄与率は低くなっていると考えられる。こうした「生活環境」よりもおしゃれをして外出したり、日々目標をもって生活するというような「積極性」のほうが「ADL自立」に及ぼす影響は強いことがわかった。また韓国ではこの「積極性」は「生活満足」に直接的な影響を強く与えている点も注目される。

また日韓ともに、このようにして支えられた「ADL自立」が安定し、かつ「積極性」があれば、「役割」の保持も高くなってくるため、より「生活満足」を得やすくなってくる。

つぎに「経済状態」についてであるが、全体量を同じとしてとらえると「生活満足」に与える影響は日本よりも韓国の方が大きいことがわかった。また韓国の場合、年金制度は日本ほど普及しておらず、被調査者の半数程

度が子どもからの仕送りに家計を頼っており、そうした意味からも経済状態は「家族的サポート」と関係性が深い。日本の場合は子どもからの仕送りがある人は2割弱で、年金をもらっている人は9割弱となっており「経済状態」と「家族的サポート」は韓国ほど関係性が強くない。

そして、こうした常に安否を気づかってくれる人や悩みごとを相談できる人がいる、また家族での会話や子・孫との交流が多いといった「家族的サポート」は「生活満足」に与える影響が大きい。ひとり暮らし、同居、別居といった家族の住まい方ではなく、家族の交流の有無や日常的な情緒面での安定が「生活満足」を左右する傾向が強いことは両国ともに共通していた。

## VI. 考 察

これまでの日韓比較から、高齢者が日常生活を送るうえで身体的にも社会的にも自立できる期間である“健康寿命”の延長という視点でみると、図3の①のように韓国は高齢者自身の積極性によるADL自立及び年金制度などの普及による経済的安定等、高齢者ひとりひとりに直接はたらきかけることによって標準曲線が理想曲線方向へ移動し、結果として健康寿命の延

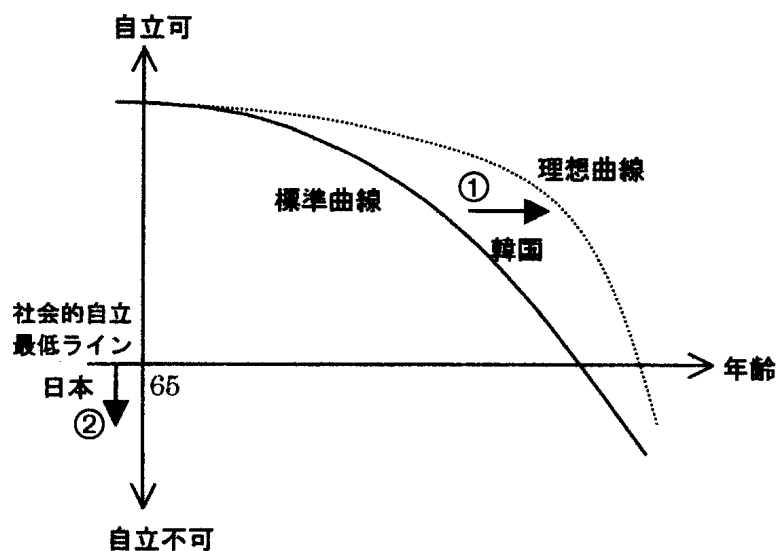


図 3

長という効果をもたらすことが考えられる。

一方の日本は、韓国のような高齢者自身の積極性によるADL自立及び経済的自立といった意味での年金制度などの普及といったものは高齢化を早く迎えたことから、すでに安定している。日本の高齢者のADL自立は積極性よりもむしろ生活道具の多機能化・複雑化ということにみられるいわゆる“変化の早さ”についていけないこと、すなわち生活環境自体が壁になっておりADL自立を妨げているという構図となっている。こうした状況で健康寿命の延長という効果を得ようとすれば、図3②のようにADL自立に必要な生活環境ストレスを取り払うといった社会的自立に必要な能力ラインを下げるのが有効であると考えられる。

今回、健康寿命の延長に導くための有効な手段はこれまで述べてきたように日韓で異なるものであるということが明らかになった。社会の変化がそこに住む高齢者の日常生活に浸透していくスピードと、高齢化という指標における社会の成熟度によって、高齢者の自立に必要な要素すなわち健康寿命の延長に必要な対策は、その段階によってかたちを変えるものである。それと同時に高齢者自身にとっても、また行政の財政面からみても理想とされる“健康寿命”の延長には、高齢化というほぼ不可逆的な社会変動のベクトルを見越して、加齢とともに衰退する身体面の特徴を考慮した生活環境の再整備が急がれる。特に日本は急がれるべきであるが、生活インフラの再整備には長い時間を要することから、現在はそうした需要が低くても、韓国も日本同様に生活環境や生活道具のデザインをすべての人に受け入れられやすくするような“ユニバーサル化”の検討は急務であると考えられる。

#### 参 考 文 献

- 日隈健任他「高齢化社会と地域福祉(1)～(5)」広島修大論集第40巻第2号(人文編),  
広島修道大学人文学会, 2000～1年  
広田ともよ「社会福祉と高齢者生活意識構造の因果モデル」アプローチ第9号, 広島  
修道大学大学院社会学研究室, 2001年



広田：高齢化社会と地域福祉（9）

広田ともよ「社会福祉・保障の給付と負担に関する高齢者意識調査」アプローチ第8号，広島修道大学大学院社会学研究室，2000年

愛媛県『愛媛県統計年鑑』2000年

厚生省『厚生白書』1999～2000年

仁科健一「韓国の福祉・希望と現実」社会評論社，1998年

経済企画庁国民生活局「生活構造の日韓比較」大蔵省印刷局，1996年

古川俊之『高齢化社会の設計』中央公論社，1996年

調査協力（敬称略順不同）

宇和島市の皆さん，宇和島市役所，宇和島市社会福祉協議会，愛媛女子短期大学（宮本晋一，健康福祉コース学生），ヘルパーボランティアの皆さん，呉大学看護学部（森川千鶴子），有限会社アクション（向井三男），霊岩邑の皆さん，霊岩郡庁，霊岩邑庁，光州日報社，日韓ちんぐの会霊岩支部，日本語通訳学生ボランティア，広島修道大学（日隈健壬，姜炫周，石橋勇，大石三詠，加藤智美，加藤由佳，藤岡久美，松浦雅代，山村友香，青山美登里，小林優子，廣中絵美，山田友美，河野優美子，濱本知慧子，堀内洋子）